

もののけ達の居るところ

ひねくれ絵師の居候はじめました

神原オホカミ Ohkami Kanbara



アルファポリス文庫

プロローグ

言葉にできるものだけがすべてじゃない。

形にできるものだけがすべてじゃない。

そういった言葉や形にできないものに出会うのは単なる偶然ではなくて、運命の領域で神様のいたずらなのかもしれない――

だから自分がその場所に導かれたのは必然で、運命であってもおかしくはない。

そんなことをぼんやりと考えながら歩いていると、瑠璃るりはいつの間にか立派なお屋敷の前にたどり着いていた。

この界限で神の化身だと言われている鹿が家の中に入ってこないように、立派な格子のついた数寄屋門すきやもんをしっかりと閉める。

「戻りました」

家の中に入ると、瑠璃の帰宅を察知したらしい家主がバタバタと足音を響かせながら駆けつけてきた。それから慌てた様子で瑠璃を出迎えつつ手を伸ばす。

「お帰り、瑠璃。それと——」
 「ただいまです、龍玄先生。はい、どうぞ」

待っていたと言わんばかりに家主——画家の龍玄が差し出してきた手のひらに、瑠璃は小さな青色の粉が入った小瓶を手渡した。

「ああ——すまないな」

ありがとう代わりか、ポンポンと瑠璃の頭を撫でて、彼はすぐに踵を返した。

その濃紺の作務衣の残像を目の端に写しつつ、瑠璃は買い物袋を持ってキッチンへ向かった。

荷物を片付け終わってホッと一息つこうとしたところで、龍玄の大きな声が響く。

「おい、瑠璃！」

驚いて廊下に顔を出すと急ぎ足の足音が迫ってきている。さらに、瑠璃にしか聞えないこの家の住人達の『声』が、あちこちで騒めき始めた。

「ああ、あかんあかん！ はよ逃げ、あんた」

「まずいなあ、龍玄怒ってしもたわ！」

『おお！ えらい恐ろしい顔しとるわ……』

どうやら何かが起こったらしい。『声』の言う通り、廊下の奥から現れた龍玄は

さっきの穏やかな様子とは打って変わって苦い顔をしていた。

「先生、どうしたんですか、そんなに慌て——」

「筆を折られた。あの髭もじゃウサギめ、見つけたらただじゃおかない！」

瑠璃の言葉を遮りながら現れた龍玄は、ぼつきりと折れた筆を持っていた。いまだ瑠璃の耳には、あちこちから犯人を逃亡させようとする『声』が届いてくる。

「もののけの仕業ですか？」

「ああ。あいつら、人の家に勝手に居ついて、悪戯ばかりしやがるな」

『もともと居ったんじゃ、新参者のくせによお言うわ』

瑠璃の頭上からは、独特な洪みのある『声』が呆れた響きを含んで聞こえてくる。「くそう、あの筆は柔らかいイタチの毛で気に入ってたのに……今度あいつの尻尾の

毛むしって、筆にしてやる」

あまりにも悔しそうな顔に、瑠璃はこらえきれずに笑ってしまふ。

瑠璃の耳には、『はよはよ』、『こつちに隠れたらええ』などと様々な『声』が響いている。犯人のウサギ風もののけはみんなに匿われたようだ。

「あはは、もうどこかに逃げられちゃったみたいですよ」

龍玄は辺り一帯を睨み散らしながら口をへの字に曲げていたのだが、瑠璃の笑顔を

見るとぼりぼり頭を掻いた。

よく見ると作務衣さむえのあちこちに、まだ乾いていない絵の具の跡が残っている。

瑠璃がOutcomeかけている間もずっと、作業部屋に引きこもっていたのだろう。

瑠璃は、そんな龍玄の様子を見て微笑んだ。

「先生、一緒に休憩しませんか？」

「まあ……一息つくか。筆は明日でもいい」

「そうしましょう。なんのお茶がいいですか？」

龍玄は、折られた筆を腹立たしそうに見つめてから、ふんと息を吐いてポケットにしまった。

それから椅子に座ると、ムツとした顔で瑠璃へ視線をずらす。

「……もののけが嫌いな茶をくれ」

「わかりました」

もののけが嫌いな茶というのは、この家では珈琲コーヒーを示す。

瑠璃は龍玄の答えに笑いながら、珈琲コーヒーミルを取り出して豆を中挽きにした。

瞬く間にキッチン全体がいい香りに包まれていく。挽き終わった粉を布製のフィルターにセットしてお湯を注ぐと、ゆつくりと珈琲コーヒーが落ち始める。

ぼた、ぼた……と珈琲コーヒーのしたたる音を無言で聞きながら、目をつぶって香りを楽しむ。できあがる頃合いを見計らって、瑠璃は戸棚からカップをふたつ取り出した。

「先生、できましたよ……先生？」

「あれまあ、寝てしまったわ。瑠璃の前じゃ、子どもと変わらへんなあ」

この家のまじめ役であるもののけが、瑠璃の頭上でくすくす笑うのが聞こえる。

温めたカップに淹れた珈琲コーヒーを持って龍玄に向き直ると、彼は机の上に突っ伏してすやすやと寝息を立てていた。

「……先生、ありがとう」

瑠璃は突如電池切れを起こした龍玄の背に、そっとブランケットをかけた。

庭には日差しが程よく届いている。もうすぐ暑い夏がやってこようとしているのだ。「ここに来て、もう半年近くになるのね」

「おお、もうそんなになるのか！」

淹れたてで香りの高い珈琲コーヒーを口に含みながら、瑠璃はふうと息を吐いた。

「そうよ。あなた達とも、ずいぶん仲良くなれた気がする」

龍玄と出合い、人とは違う存在である『もののけ』が居るこの家に来た時のことを

瑠璃は思い出していた――

第一章

文房具が好きだった。小さい時に連れていってもらった文房具屋で見た数々のアイテムは、当時の瑠璃の目に魔法のグッズと同等のものに見えていた。

キラキラした色が出るペン、柔らかくていい匂いのする消しゴム。可愛いメモ帳に、色がたくさん混ぜ込まれた鉛筆……

どのアイテムも、瑠璃にとって笑顔になれるものだった。

文房具という魔法のグッズへのあこがれは、中学校へ上がっても、高校へ進学しても消えなかった。文房具は日々進化を遂げて、毎日瑠璃の生活を飽きさせない。

可愛い絵柄が描かれた修正テープは、全種類を集めていまだに大事に本棚に飾っており、瑠璃の宝石箱のようなものだった。

瑠璃が年季の入った文具店に勤めて、四ヶ月を過ぎた。

大好きな文房具に囲まれて過ごすのは、とても心地がいい。

ぼんやりしていると人がやって来る気配がした。

入店者を知らせるチリチリ鳴る風鈴に、瑠璃は棚の埃を取る作業をいったん中断する。

「——いらっしやいませ」

曆トキの上ではもう秋だというのに、まだまだ薄手のシャツ一枚でも大丈夫なほど日中は暖かい。むしろ暑いと感じる気温で、動いていると汗ばむくらいだ。

額ヒタに滲シんでいた汗をさりげなく拭き取り、エプロンについた埃を払う。入ってきたお客さんを玄関先に見に行つて、瑠璃は頬を緩ませた。

「こんにちは、長谷ハセさん」

瑠璃の出迎えに気づいたスーツ姿の青年は、ニコニコと陽気に手を振った。

「ああ、瑠璃ちゃん居てくれて良かった。また、先生に訳のわからないものを頼まれちゃって……ほんと、人使い荒いよね」

困ったように眉毛を八の字にする長谷は、画廊に勤めているマーケットだ。彼はこの文房具屋の近くに住んでいる超売れっ子の人気日本画家、龍玄の担当をしている。

そして、人嫌いで有名な龍玄におつかいを頼まれては、ものすごく困りながら店にやってくるのだ。

「もうね、俺からしたら古代文字か外国語だよ。わかっていないのに買いに来させる

のもどうかと思うんだけどさ」

瑠璃は長谷が取り出したメモ書きを見て、ふむふむと頷いた。

「面相筆と、岩蘇芳の岩絵の具……ええと、番手はおっしゃってましたか？」

「番手？　なんだろう、言っていたような、言っていないような」

瑠璃が紡ぎ出した言葉に、長谷はきよとん、と首をかしげた。瑠璃は日本画の画材の棚まで長谷を誘導する。

そこに陳列してあった岩絵の具に手を伸ばすと、二つの小瓶を選んで並べて見せた。「番手」は絵の具の、ここに書かれている番号です」

瑠璃が瓶に貼ってあるラベルを指し示す。もう一方の手に持った瓶には、同じ色でも別の数字が書かれていた。

「十段階くらいに分かれていて、絵の具の粒子の大きさが違うんですよ。だから、同じ色でも、粒の大きさの違いによって色味が変わって見えてきます」

それに長谷はなるほど、と手を打った。

「さすが瑠璃ちゃん、日本画学科出身だけあって、いつもすぐく助かる！」

「いえいえ。お役に立ててなによりですよ」

「でも、その数字を言っていたのかどうか忘れちゃったから、もう一回聞きに戻らな

くっちゃ……トホホだよ」

「でしたら、今度いらつしやる時までにお手製の注文用紙を作っておきますよ」

瑠璃は、暑い中何度も家と店を往復させられる長谷のためを思って、色見本のパンフレットを取り出した。

「これに番手を示す番号を書き加えておいたものを用意しますから、購入希望の商品と番手に丸をつけて渡してくださいね、こちらで揃えておきます」

「なにそれ！　めちゃくちゃ助かるよ！」

「先生のお家に戻られるなら、面相筆の太さと毛の種類も聞いてもらえますか？」

いっばい種類があるんですよ、と瑠璃が指示した棚を見て長谷はぎょっとした顔をする。

「陳列していない筆も倉庫にありますし……在庫がなければ発注しますので」

「瑠璃ちゃんがいなかったら、俺、絶対に怒鳴られて文句言われてたと思うよ」

「画材は、驚くくらい種類が多いですよ。私も把握しきれませんから」

瑠璃は聞いてきてほしいことを、メモに書いて長谷に渡した。

「本当にありがとう！　今度ちゃんと、お礼するね」

「いえ、お礼なんてそんな……できることをしただけですから」

長谷は「二度手間だよね、これじゃ」とトホホな表情をしてから、先生が来ればいいのにと口を尖らせた。

「面倒見が抜群にいい長谷は、憎まれ口をたたきつつも今一度、それらを龍玄に聞くために店を去っていく。」

遠ざかる長谷の後ろ姿を見送ってから、瑠璃はふうと一息ついた。

*

瑠璃が文房具にそして画材に興味を持ち、美大へ進んだのは五年ほど前の話になる。好きなことの延長線上に美大を選んだのは普通だと思ったのだが、両親……特に父親は瑠璃の進路選択についていい顔をしなかった。

「両親は美術大学を少し特殊な学校だと認識していたようだ。就職や結婚に影響が出るのではないか、限られた企業にしか勤められないのではないか何度も聞かれた。」

女の子は普通の大学を卒業し一般企業に就職するのがいいとする両親の尺度からすると、美大は普通からはかけ離れた選択のように思えたのだろう。

それでもなぜか意地を張りたくなくて、絶対に美大にいくと瑠璃は頑なに意志を

曲げなかった。それは初めてとった親への反抗だったはずだ。

親を説得できたのは、瑠璃が美大に一発で合格したからだ。それが大きな説得材料となり、瑠璃は日本画学科へ進学を決めた。

絵の才能は、あった方だと思っている。

だからその当時は、画家になることももちろん視野に入れて、期待に胸を膨らませていた。

しかし——
周りにいた鬼才・天才・変人達を見ているうちに、瑠璃は自分の平凡さに気がついてしまった。

常識破りで感性が斜め上の人しかいない集団にいれば、感化されて自分ももっと素晴らしい才能に目覚める……というわけではなかった。

刺激を受けることは多々あったものの、天才ばかりの中において、瑠璃は自分が平凡、よく言えば常識的であるということを思い知った。

どんなに頑張っても想像力を凝らしても、彼らのような発想力も感性も瑠璃にはなかったのだ。

それくらい、瑠璃は両親が望む『普通』の人間だった。

彼らと自分との間に線が引かれているような気がしてきたのは、学生生活も半分を過ぎた頃だ。

それは、憂鬱ゆううつになるような疎外感ではなかったが、自分はこの人達とはどこか違うというのだけは理解した。両親の望む呪縛から解放されず、あがくことにも疲れ始めていたのかもしれない……

悩んでいるうちに、瑠璃は絵の才能を持っている人達がさらに力を発揮できるような画材や素材を提案し、届ける側になりたいと考えるようになった。

そこには、自分の活路を見いだせなかったというのが本音でもある。

困っている彼らに最善の道具を提案し、いいものがなければ自分も一緒にあってあちこち探し回り、適切な素材を集める……

それは、好きな匂いの練り消しを揃えるために文房具屋を巡った、子どもの時の感覚に似ていて楽しかった。

そうして瑠璃は卒業後、迷いなく絵の具を販売する会社に就職した。

収入が不安定な画家になることを心配していた両親は瑠璃が一般企業に勤めることになったと伝えると、ホッとした顔をしていた。この時には、『普通』でいる方がいいと瑠璃自身も思い始めていた。

それから、希望していたセールスマーケティング部に、見事配属を果たしたのが約一年半前になる。

大好きな絵の具を、求めている人に届けたい。その思いが実現したようで嬉しくて仕方がなかった。

しかし就職できて喜んでいた気持ちは数ヶ月後に消えた。

周りにはいくつものノルマをこなし、多くの販売取引先を駆け巡り、鬼神のように働いている人達しかいない。瑠璃は彼らの足元にも及ばない仕事量しかこなせなかった。

勤めて半年を過ぎたあたりから、あまりの激務に身体が追い付かず、瑠璃は不眠症になった。薬を飲み、身体に負担をかけないようにしながら頑張ってみたものの、症状はさらに悪化の一途をたどった。

気がつけば食が細くなり、軽い鬱うつだと診断された。

瑠璃は、こんな所でも自分がいかに平凡であるかを痛感したのだった。そして、瑠璃が会社を辞めざるを得なくなるまで、そう時間はかからなかった。

『ねえねえ、お姉ちゃん。あの棚の下に、なんか落ちとるよお』

耳の横から小さな女の子の『声』が聞こえてきて、瑠璃はハッとしたり。長谷のために色見本に番号を書き込んでいる最中に、手が止まってしまっていたようだ。

『ねえねえ』

また呼びかけられて、瑠璃はため息を吐く。静かな文房具屋の店内にお客の姿はない。周りに誰もいないことを、瑠璃は知っている。

そして、この『声』が瑠璃にしか聞こえないということも……

『あれ、聞こえへんかった？ あっちになんか落ちとるで』

大慌てで瑠璃は耳を押さえたのだが、『こっち、こっちだよ』と繰り返言われてしまう。聞こえないふりをするにも疲れたので、仕方なしに立ち上がると棚へ向かった。

『ここや、この下にあるで』

不安で心がざわついたが、言われた通りにかがみ込んで棚の下を覗く。じっと目を凝らすと、売り物のシャーペンシルが落ちていたのを発見した。

『あ、こんなに奥に落ちちゃったんだ』

かろうじて手が届く範囲にあるので、床に這いつくばるようにして手を伸ばし、

シャーペンシルを引っ張り出す。

多少の埃が付いていたが、目立った傷や汚れは見当たらない。商品として問題がないようで安堵する。

落ちていることを教えてくれた『声』に、お礼を言いたい気持ちはある。しかし、誰もいない空間でひとりごとを呟いていたら、おかしい人だと思われてしまう。

なので、瑠璃は散々迷った拳句、うんと頷くだけにとどめた。

その行為をお礼だと受け取ったのか、幼い少女の『声』が嬉しそうにくすぐすと笑うのが聞こえてくる。

『ふふふ。どおいたしまして』

今まで自分が立っていた棚の辺りを見るが、そこにはなにも誰もいない。

『……ほんと、私どうしちゃったんだろう……』

瑠璃にはこうして時々、不思議な『声』が聞こえる。

誰のものかわからないが、小さい子どものような声だったり、やけにしわがれた声だったり、様々だ。

そして瑠璃はそんな不可解な幻聴に、ずっと苦しんでいた。

「やっぱり、どこか私……」

瑠璃が無茶をしすぎた時や、コンロの火を点けっぱなしにした時、忘れ物をした時など、困った時に教えてくれて助かったことはある。

だが、不注意があった時くらいで、普段からこうもはっきりと聞こえるわけではなかったのだ。

幼い頃や学生の間は、空耳そらみみの領域だと思えるくらいの頻度だった。仕事に忙殺される日々になれば、忙しさの方に神経が削がれ、『声』はほとんど聞こえなくなっていた。

それなのに、ここ最近はまだでストップパーが外れたようにあちこちから色々な『声』が聞こえてくる。

その現象は瑠璃の神経をさらに尖らせ、氣力を削いでいった。

聞こえていないと思えば思うほど、それらの正体不明の『声』は聞こえてきてしまう。

医者に相談しても検査で聴覚に異常は見当たらず、ストレスから来る幻聴だと言われてしまうだけだ。

投げやりに診断されたのではないかと思ひ、医者を数軒回ったのだが、どこでも結果は同じだった。

この生きにくい世界で、ストレスがない人間なんているのだろうか……

そんなことを考えながら作業に戻り、岩絵の具の色見本のパンフレットに丁寧に番号を手書きで付け加えていく。

「これがあれば、次回からはもつと長谷さんは楽になるかしら？」

しかしパンフレットに載っていない岩絵の具ももちろんあるわけで、記載されていない品番や他社メーカーのものも集めるとなると、今日一日の仕事はこれだけで終わりそうだ。

『瑠璃、忙しいやろ？ 少しは休憩せんと、また体調崩すぞ？』

瑠璃はしわがれた『声』に注意されて、思わず眉根を寄せる。

声の主は、まるで瑠璃が体調を崩していることを知っているかのような口ぶりだ。しわがれ『声』は、ずっと昔から瑠璃に声をかけてくる。そして、こうして心配そうにお節介を焼いてくるのだ。

『ほれ、昨晚だつてろくに眠ってないやろ？』

話しかけてくるのは、自分が生んだ妄想なのだろう。

いくら聞こえないと思ひ込もうとしても、現実として聞こえてしまう。無視したらいいと医者に言われたけれど、こうして無視できないほど口出ししてくることもある

のだ。

特に、いらぬお世話を言い始めた時のしわがれた『声』は、瑠璃にどンドン話しかけてくる。そうになると、それを聞かえないと思ひ込む方もはやストレスだ。

「大丈夫」

無視できる限界を超えた時に、やつと瑠璃は返事をした。

「忙しくないもの、以前に比べたら」

『せやけど、無理せんでな』

自分の妄想に自分の身体を心配されるなんて、と瑠璃は苦笑いを嘸み殺した。

このしわがれた『声』の主はきつと自分だ。

疲れすぎた自分が、いくつもの別人格を形成している。

(でもね、忙しくても、楽しかったの。仕事はすごく好きだったんだもの……)

瑠璃はため息を吐くと、また別メーカーの岩絵の具のパンフレットを取り出して品番をチェックしていく。

仕事を楽しかったという思いに、嘘偽りはない。

好きなことに携われている自分をとて誇らしく思っていた。普通に仕事をこなしていることが、なによりも自分自身を安心させていた。

毎日我を忘れるくらいに目まぐるしく、気がつけば帰宅は深夜、翌朝も早朝出勤と
いうのはざらにあった。

「好きだったの、仕事……」

忙しいことは、充実していることと同じだと思っていた。だが気がついた時には眠れなくなっていて、デスクに座るとなにもしていないのに涙が流れていた。

上司は瑠璃の様子がおかしいことに気がつく、病院での検査を勧めた。

瑠璃が軽度の鬱うつと不眠症という診断書を持って出社すると、迷わず休職を提案してくれた。

彼が瑠璃を心配してくれたのは確かだったし、周りも体調を気遣ってくれたと思う。なのに、陰でなにか言われているのではないかという不安が拭い切れず、人の目を見ると不信感を募らせるようになってしまった。

誰かが陰で話していると、自分のことを言われているのではないかという恐怖に
られ、背中にびっしり冷や汗が滲じんだ。

(そうだ、父さんと母さんが言い争っていたのがすごく心に残っていて——)

それは瑠璃がまだ幼く、妹が生まれてすぐの頃。怖い夢を見て起きてしまつて、リ

会社の人達が、瑠璃のことを悪く言っていたかどうかは、わからない。しかし、瑠璃を見る目の奥には、あの時の母親と同じように疑いがちらついているのがわかった。だからこそ、瑠璃は会社にいられなくなってしまったのだ。(好きなことをしていて楽しかったのに、どうして、ダメになっちゃったんだろう) 自分はどうしても少し頑張れなかったのか。どうして我慢して勤められなかったのか……すべての責任は自分があると瑠璃は感じていた。

『あんまり自分を責めん方がええで』

(でも、あんなにみんな優しくかったのに……)

しわがれ『声』は、瑠璃の気持ちを感じてくれる。幻聴に励まされたところで、自分自身を甘やかしているようにしか思えなかった。

『ああ、泣いたらあかんで。ほら、涙拭き』

言われて、いつの間にか涙が出たことに気がついた。

ぽつんと一滴、パンフレットの一部分に涙が落ちて染みをつくっている。それは、きつとあつという間に蒸発して、なにもなかったかのように消えていく。瑠璃はそれを見ていられなくて、手で拭ってしまった。

ピングの明かりを頼りに両親を探しに行った時のことだ。二人はリビングの机に向かい合って座っていた。

『……瑠璃はどこか変だわ。誰もいないのに一人で会話しているなんて、普通じゃないと思うの。桃子はなんともないのに』

病院に連れていこうと提案する母親の顔は、泣いて目が赤く腫れていた。扉の外でその光景を見てしまい、声をかけるのをためらって立ち尽くした。

『あの子、とにかく変よ』

聞いてはいけないことを聞いてしまったような気持ちになって、すぐさま部屋に戻った。

(——もう、『声』が聞こえても話しかけないようにしなくっちゃ)

そうして瑠璃は、聞こえてくる『声』を徹底的に無視するようになったのだ。聞こえないふりをしていると、瑠璃を見る時にどこか不安そうだった母親の顔がだんだん明るくなっていく。

(あんな風に私が我慢できていれば、こんなことにならなかったかもしれないに——)

手描きの注文番号を書き込んだパンフレットを何冊か用意し終わる頃に、再び長谷が店に顔を出した。

困ったように八の字になった眉毛を見て、また龍玄に難題を言われたのかなと瑠璃も苦笑しながら出迎える。

「長谷さん、お茶でも淹れましょうか？」

「瑠璃ちゃんほんとに助かるよ。先生の所は、お茶どころかもはやなにがなんだか……」

長谷はカウンター前の丸椅子に腰を下ろすと、疲れたー！ と息を吐き姿勢を崩してネクタイを緩めた。

「たまにお茶を出してくるんだけど、なんのエキスから抽出されたのかわからないから、とてもじゃないけど飲めないんだよ」

「それは……困りますね」

長谷はよっぽど疲れたのか、龍玄の屋敷の凄惨さを伝え始める。

瑠璃は頷きながら曖昧に微笑んで冷たい麦茶を渡した。

「困るなんてもんじゃないよ。先生の屋敷はほんとうに散らかりすぎててさー」

「あはは、長谷さんいつも困っていますよね」

「そうなんだよ。あんなに立派なお屋敷なのに、もったいなさすぎる」

軽口を叩きながら、長谷はワイシャツの胸ポケットからメモ用紙を広げて瑠璃に見せた。

「あ、これがその番手ばんて？ らしいんだけど……ごめんね瑠璃ちゃん。俺にはさっぱりで説明ができません」

大丈夫ですよと瑠璃はにつこりする。

さりととした筆致でメモに書かれていたのは、瑠璃にとっては見慣れた内容だった。即座に脳内で先ほどのパンフレットの商品と一致させる。

「ええと、こちらは今お店に在庫がないので、取り寄せます。おそらく、三日から四日ほどで届きます。届いたら、長谷さんに連絡入れますね」

瑠璃はすぐに取り寄せ伝票を用意して、商品名を記入した。それからメモに書かれていた岩絵の具を探しに行き、店頭にないので裏の倉庫から探して持つてくる。

するとそんな瑠璃の動きに、麦茶を飲み干した長谷が拝むように手を合わせた。

「もう、瑠璃ちゃん最高だよ。っていうかさ、やっぱり先生が買いに来たらいいのね！」

「ですが、龍玄先生は人嫌いで有名ですし……」

「そうだけど、少しくらい屋敷から出た方がいいと思うんだよね」

「引きこもった方が、いい作品が描ける時もありますよ。それに、長谷さんがいてくれるから、きっと先生も安心していらっしゃると思います」

長谷は二杯目の麦茶を嘔き出しそうになりながら、ないないと大げさに手を振ってみせる。

「安心もなにも、俺はただの営業だよ。使いつ走りじゃないっていうのにさ！」

「長谷さん、面倒見がいいから」

「そうなんだよね。それが俺の美德であり、欠点でもあるというか。だからって、こんなにおつかいを押し付けられるとは思ってもみなかった」

また長谷は眉毛を八の字にして愚痴をこぼした。ただ妙な愛嬌と明るい声のせいで、愚痴があまり愚痴に聞こえないのがすごい。

瑠璃がくすくす笑うと、長谷はまた大仰に眉毛を八の字にしてみせる。

「先生が新作を描いてくれるって言うから、俺だって頑張って通ってるけど、そうじゃなきゃおつかいなんてごめんだよ。先生が言っている言葉のほとんどが、呪文みたいなんだもん」

「それだけ、長谷さんが頼られているっていうことです。人嫌いで有名な先生に気に入られるなんて、なかなかできないことだと思いますよ？」

「だったら日頃の感謝を込めて、俺に特別に一枚くらい描いてくれてもいいんだけどな」

長谷は瑠璃の渡した伝票に名前と電話番号を記入し終わると、だらんと脱力した。

そう、さびれたという表現がしっくりくる年季の入った文房具屋に、長谷がこうして足しげく通う理由はたった一つ。彼が肩入れしている龍玄が好む画材が置いてある文房具屋が、この辺りではこの店しかないからだだった。

昔ながらの文房具屋は、たいがい大きなショッピングモールのせいで潰れてしまい、生き残っているところは画材専門店のようにになっているのがほとんどだ。

この文房具店は、後者に近い立ち位置だった。そのおかげもあって、龍玄のご用達ようたしになっている。

「どんなに早く描ける人でも、描ける時と描けない時の差ってありますから。こうして絵の具を購入しているくらいですから、きつとなにか描いているんだと思いますよ」

世界がひっくり返るほどの天才でも、スランプの一つや二つはある。瑠璃は絵を描

く立場の人間が、どんな苦勞を抱えているか重々承知していた。

「そうなんだけどね、と長谷は机に突っ伏した。

「もうさ、決まっているんだよ来月の個展。なのに新作が一枚もないんじゃない、秘蔵過去作品展に変えなきゃだよ。あー、もうほんと、人嫌いなのはわかるけど、じゃあ俺のことをこき使うのはなんでよまったく」

瑠璃は苦笑いしながらもう一杯麦茶を注ぎ、お茶請けを出す。すると長谷はまるで少年のように目を輝かせて、「瑠璃ちゃんほんと気が利く！」と小さなチヨコレートを美味しそうに頬張った。

文句を言っているものの、長谷はなにかと世話焼きで人懐っこい性格なので、気難し屋の龍玄も心を許しているように瑠璃には思っていた。

しかし、実際長谷は経済学部出身のため、絵画や画材についての知識は瑠璃や龍玄には確実に劣っている。画材の注文を頼まれては、その度に謎の呪文みたいだと困っているのも、いつの間にか瑠璃が手助けをするのが当たり前になっていた。

「俺はさ、瑠璃ちゃんが龍玄先生のところで助手をしてくれたら、最高だと思うんだよね」

長谷が身を乗り出してくる。

「引越しか再就職先とかで、瑠璃ちゃんすごく悩んでいるもんね」

「そんなお話を振っていただけなんて、私が化け物になるくらいの高確率でありえませんよ」

長谷は先生だって化け物みたいなもんだから大丈夫だよ、と訳のわからない理由付けをして笑い飛ばす。

「瑠璃ちゃんにその気がなくても、先生がいつて言うかもしれないし」

「いえ、私はそんな大それたことできませんから」

瑠璃がうつむくと、長谷はそれ以上触れず来月開かれる龍玄の個展について話題を移した。それからしばらく、絵のことで長谷と話し込んでしまった。

盛り上がったところ、時計を見た長谷が「いけないっ！」と言って慌てて立ち上がる。

店の入り口まで見送りながら、瑠璃は作成したばかりの手作りの注文用紙を渡した。

「もうほんと、瑠璃ちゃん神様！」

長谷は瑠璃を拝むようにしてから、龍玄の屋敷へ小走りに戻っていった。

そろそろ店じまいの準備をしなくちゃと瑠璃が思っていると、店の奥さんが出てくる。

「あら、にぎやかだと思つたら、やっぱり長谷さん来ていたのね」
 「はい、龍玄先生のおつかいで」

旦那さんが経営していたこの店を、旦那さんと死別してから一人で切り盛りしている奥さんは、穏やかで感じのいいグレイヘアがよく似合うマダムだ。県をまたいだ都市部でマンションの大家おおやをしており、収入に困っているというわけではない。なので店は豊んでもいいのだが、旦那さんが愛した店だからということでも残っていた。そのため、専門の画材を扱いつつも、一般の人が使うような文房具も取り揃えているという訳だ。

「瑠璃ちゃん、戸締りしたらもう上がっていいわよ。今日は、長谷さんだけでしよう、お客さん」

「はい。じゃあ、シャッター閉めてきますね」

瑠璃は店の前へ行き、長い棒を使ってガラガラと上からシャッターを引つ張り下ろす。戸締りを確認し、すべての出入り口と窓の施錠をすると店の電気を消した。

(また明日……)

誰もいない店内に、さようならとお辞儀をする。

『また明日な。お姉ちゃんが来るの楽しみに待つとるで』

するとまた女の子の『声』が返事をしてきた。瑠璃は唇をきゅつと引き結び、すぐに裏口から店を出ると急いで帰路についた。

*

瑠璃が現在住んでいるのは、四ヶ月前まで働いていた職場の社宅だ。それまでは、本社に近い都市部の社宅に住んでいた。

休職してから、瑠璃は実家に戻らず本社から少し離れた場所にある別の社宅に引越した。県をまたぐため割安で借りられるということで、実家を頑かたなに拒む瑠璃に上司が提案してくれたのだ。

本当は、すぐに会社を辞めるべきだった。けれど、環境を変えて少し落ち着いたらまた復帰できるかもしれないから、という上司や同僚の提案をむげに断ることができなかった。

そういう理由で、鹿がたくさんいる奈良の社宅へ引越したのが、四月の終わりのことだった。

引越してすぐは緊張で眠れない日々が続いたのだが、都会の喧けんそう嘩から離れてし

らくすると、だんだん瑠璃は落ち着きを取り戻した。それほど遠くない場所に実家があるのに、瑠璃が一人暮らしを続ける理由はいくつかある。

その一つが、実家に帰ろうと思って両親へ連絡をした時に味わった、なんともいえない胸に広がるえぐみだ。

——あの時の感情を、いまだに瑠璃は引きずっている。

「鬱^{うつ}になるなんて心が弱いからよ」

会社を休職するという事情を電話で説明した時の母の言葉だ。

瑠璃が自分自身を甘やかしているという一点張り、両親は一切話を聞いてくれなかった。それで、実家に帰れなくなった。

もちろん、悪いのは心が弱い自分なのだけ……

引越しの後、一ヶ月の休みを申し出て静かな古都で過ごすようになると、ささくれ立った心も若干静まった。

しかし、休職期間を終えて意気込んで入社した瑠璃を待ち受けていたのは、会社の前で立ち尽くしたまま動けず、ぼろぼろと流れる涙を止められない弱いままの自分だった。

そのまま足早に引き返し、上司に連絡を入れて休むことを告げた。

——あの時、なぜ立ち尽くしてしまったのかも、泣いてしまったのかもわからない。会社に行くことは怖くなかったし、仕事は楽しかったはずだ。それなのに、瑠璃の両親は、頑^{かた}なにこわばって動くことができなかった。

いたたまれない気持ちのまま、初夏を迎える前に退職願を出した。

結局、大好きだった仕事を、一年勤めただけで辞めてしまった。

瑠璃を心配した上司は、家が見つかるまでは今の場所に住んでいても問題がないように、会社に掛け合ってくれた。

瑠璃は会社と上司の対応に甘えてしまっ、いまだ元勤め先の社宅に半年を上限に住まわせてもらっている。

(こんなことをして甘えてばかりいてはダメなもの……)

年内をめどに出ていくと言ったのは瑠璃自身だった。自分でタイムリミットを設けて社会復帰しようと決めたのだ。

なのに、再就職先が見つからないまま、瑠璃は文房具屋でアルバイトを続けている。社宅を出ていくと決めた年末まで、あと数ヶ月に迫っている。

それまでに、どこかへ引越しをしなくてはならない。きちんと社会復帰すること

すままならぬ自分がどうしても納得できず、つらかった。

(……復帰できると思っていたんだけど……。私、ずいぶんと自分を甘やかしすぎてしまったんだ)

電車に乗って、流れていく窓の外のどかな景色を眺めた。その風景は瑠璃の心を癒すと同時に、心に緩みを作ってしまった。

(ダメだって思うのに、このままでもいいと思ってしまう自分がいるのよね)

今働いている文房具屋を見つけたのは、引越してすぐのことだった。気分転換に散策していると、大通りから一本入った脇道で文房具の看板が目に残り、懐かしい思いにいざなわれるまま、店内にふらりと立ち寄ったのだ。

それから奥さんと話すうちに、この店でアルバイトをしたいと申し込んだのは、本当に自然な流れだった。

まだ会社を辞めてそれほど経っていなかったのだが、働くことで当面の生活費の不安を埋めたかったこともあるかもしれない。

退職金は雀の涙ほどで、仕事を辞めるとお金の問題が瑠璃を苦しめた。次の働き口が見つかるまで、アルバイトで食いつなぐ方法しか思い当たらなかった。

文房具屋の奥さんは、なにも言わずにじゃあお手伝いお願いねと言って快く雇って

くれた。震える声で返事をした瑠璃の肩に、置いてくれた手の温かさに救われた。

——そして、千円に満たない時給が、瑠璃の今の価値だ。泣きごとを家族に言えず、まだ会社で働いていると嘘をついている。

そのため、働いてから毎月続けている実家への仕送りを、やめられずにいた。これ以上、誰にも迷惑をかけたくない。

(でも、もうすぐ、貯金も底をつく……)

冬が近づいていることに加えてお財布の寂しさもあり、心の中には世の中と同じように木枯らしが吹いている。最寄り駅に着くと、大きくため息を吐いた。

明日に不安しかない世界で、自分だけが被害者でいるわけにはいかない。自分がこの世で一番つらいなんてことはないとかわかってる。でも、やっぱりつらかった。

(早く、新しい仕事と家を探さないと。いつまでも被害者ぶっていても仕方ない) 『そんな急がなくてもええんちゃう？ あんまり急ぐと危ないで』

瑠璃の耳に聞こえてくる『声』は、いつも優しい。誰かに優しくされたいという思いが、こうして妄想となって別の人格を形成して話しかけてくるのだろう。

卑屈な考えを追いやるように首を横に振って、瑠璃は冷たくなり始めた空気を胸いっばいに吸い込んだ。

(ダメダメ。あんまり意気地なしなことを考えたら！)

夜には気分転換に読書をして過ごそう、と気持ちを切り替える。

奥さんの貸してくれた名画の謎に迫った本を読んで、夢の中くらいは美しい絵画が広がる中世の世界に出かけたいと願いながら帰宅した。

*

「瑠璃ちゃん、そういえば新しいお家決まった？」

翌日、瑠璃が出勤すると、奥さんがニコニコしながらお茶の用意を始めた。

商品棚のレイアウトを変えようと眉間にしわを寄せながら腕組みをしていた瑠璃は、

「まだなんです」と苦笑いをする。

「そう。私のマンションのお部屋が空いているけれど、ちょっとここからは遠いものねえ」

いざとなったら奥さんが一室を貸してくれるというのだが、それは喧嘩と雑踏が良

く似合う大都会にある。

仕事先が決まるまでは、まだこの文房具屋でアルバイトを続けたい。なので近くで物件を探しており、ありがたい提案だったが断っていた。

「この辺りでいいお家ないかなと思って、私も探しているんだけど。あんまりなのよね」

瑠璃の内情を知っている奥さんは、住まいについて真剣に悩んでくれているらしい。それが嬉しくも申し訳なくて、慌てて頭を下げた。

「お手を煩わせてしまつて申し訳ないです」

「いいのよ。私がしたくてしていることなだから」

奥さんが困るのも当たり前のことだ。この文房具屋がある周辺は観光地というだけあって土地代が高く、今の瑠璃の経済状況的に難しい。お財布事情から、二の足を踏んでしまっている状態だ。

「昨日新しく入居した方からいただいたお菓子があるの。瑠璃ちゃん一緒に食べましょう」

「いただきます！」

奥さんが用意してくれたお茶菓子と、温かいほうじ茶に瑠璃は手を伸ばした。

今日もこの文房具屋はとても静かだ。下界から切り離されたという表現がしっくりくる。公民館で開催される絵画教室用の画材を買いに、地元のご老人や近くの小学生が立ち寄ることがしばしばある程度で、客足は遠い。

それくらいが、人を見ると疑心暗鬼おそいに陥おちってしまう瑠璃としてはちょうど良かった。「今日は、長谷さん来ないわね」

「昨日いらしたばかりですから。商品が届いたらまた顔を出してくれませよ」この店では、龍玄が一番の固定客なのは間違いないかった。

にもかかわらず、瑠璃は勤めて四ヶ月経った今も、龍玄本人の影すら見たことがない。いつも困った顔をした長谷が、眉毛を八の字にしながらやって来るのみだ。

姿を見たことはないが、瑠璃は龍玄という人物がどういった画材を好むのか熟知していた。それくらい長谷は頻繁にこの文房具屋を訪れていたし、龍玄の制作状況は注文の具合からして想像できる。

「そういえば、今月号の美術雑誌に龍玄先生載っていたわよ。持ってくるから店番中に見る？」

奥さんが店の奥にある家の中から持ってきてくれた美術雑誌の巻頭ページに、龍玄の特集が組まれていた。瑠璃は雑誌を受け取ると、すぐにべらべらめくる。

「この絵のどれかが、うちで扱っていた絵の具で描かれているのかと思うと、なんだかワクワクするわね」

龍玄の作品が美しいカラー写真で何枚も載せられており、拡大図はページから今にも飛び出してくるような迫力がある。あまりの美麗さに瑠璃は息を吸うことさえ忘れて魅入ってしまった。

「瑠璃ちゃん、店番頼んでもいい？」

奥さんは用事が出て出ていくと瑠璃に言い残して、雑誌を置いてまた家へ戻っていく。瑠璃は見送ってから再度雑誌に手を伸ばした。

『すごい人やなあ、こんな特集されて』

急に耳元からしわがれ『声』で感嘆のため息が聞こえてくる。瑠璃は無視したい気持ちとは反対に、思わず小さく頷いてしまっていた。

(すごい人に違いないの。私が美大にいた時から、雲の上の人だったんだもの)

描かれた絵の美しさはもちろん、独特な世界観と本人自身の美貌が注目され続けている日本画家、それが『龍玄』という人物だった。

美術を多少なりともかじっている人であれば、龍玄の名前を聞いたことがないわけがない。それほどまでに、近年では特別に有名な人物だった。

そして瑠璃も、もれなく龍玄の作品にほれ込み、あこがれている一人だ。特集の見出しに使われている渋いフォントを、瑠璃の指がなぞる。

「もののけ画家、龍玄……」

緑色のもみじを背に、肘をついて座る和装姿の髪の長い麗人。すっと通った鼻筋が、美しくも神経質で、人嫌いを体現しているかのようだ。

時代劇に出てきても違和感がないような、凛々しくて飄々とした雰囲気が写真からも伝わってくる。

彫りと目鼻立ちがくつきりしており、温厚そうな目元とは反対に、瞳の奥には人を寄せ付けない鋭さが秘められているように見えた。

（元々、抜群に絵が上手な人だった。それが四年前くらいから、いきなりこういった絵を描き出して……）

瑠璃は雑誌に掲載されている作品の一部を凝視する。そこには、柔らかな羽毛に覆われた奇妙な生き物が印刷されていた。

——描かれているのは、この世のものならざるもの達の姿。

翼が複数ある鳥に、イタチャや狸たぬきに似ている生き物。かと思えば、提灯ちしやんや傘や鬼のような姿まで、龍玄が描く『彼ら』は表情豊かで、自然界に生息している生き物とは

違った形や仕草をしている。

この世に存在しない生き物なのに、本当にいると言われても納得してしまうほど違和感がないのだ。

（不気味だけれど、ひょうきんでリアル……本人もびっくりするくらい格好良いから、より一層注目されたの）

小見出しには、『もののけについての対談』と書かれていた。

そう、龍玄が画題とするのは、『もののけ』と呼ばれるもの達だ。

妖怪と表現されることを龍玄は嫌いだと公言している。そして、いつの間にか世間では『もののけ画家』と呼ばれるようになっていた。

それまでの龍玄はとっつきにくい印象と刺々とげとげしさばかりが目立っていた。しかし、『もののけ画家龍玄』という通り名がついたことによって、描かれた化け物達に親近感を抱く鑑賞者が一層増えた。

彼によって生み出された数々の作品は、すでに日本の有名な美術館にも所蔵されている。海外の学芸員も買いつけたことでファンが急増し、さらに知名度に拍車がかかった。

その人気ぶりは飛ぶ鳥を落とす勢いだ。

(だけど、原画を販売しないのよね。なんでかしら……?)

龍玄は基本的に原画販売をしないため、レプリカ一枚の価値が高い。

雲の上の人であるが、瑠璃は龍玄に親しみを覚えていた。それは、たまたま彼の担当をしている長谷がやってきて、龍玄のことを伝えてくれるからであり、なにより彼の使う画材を自分が揃えているからだ。

しかし実際には、口をきくことすら叶わない。

「すごいなあ、こんな絵を描けるなんて。ほんとに、この人が近くに住んでいるなんて信じられない」

『この先生はすごいけど、瑠璃もえらいきれいな絵を描くやないか』

(違う……私の絵はダメなのよ)

同じ日本画を描く人間として、龍玄が瑠璃につきつけるのは、才能の違いだ。瑠璃は彼の絵を見る度に、自分がいたって平凡であるとも思い知らされるのだ。

*

予定よりも一日早く、龍玄が頼んでいた筆が店に届いた。すぐさま瑠璃が長谷に連

絡をすると、二時間後には店に顔を出せるという。

お茶の用意をしながら、品物をきれいに包み直して長谷の到着を待った。

「——瑠璃ちゃん！」

チリンチリンと店の入り口の風鈴が鳴って、長谷が手を振りながら嬉しそうな顔をして入ってきた。

先日と同じようにまだまだ外は暑いようで、上着を腕にかけながらいつも以上にニコニコしている。瑠璃は軽くお辞儀をしてカウンターの近くの椅子まで案内した。

「長谷さん、お待たせしました。全部揃いましたよ」

「良かった！ これさえあれば、きっと先生は新作をガンガン描いてくれる……はず！」

お茶をゴクゴク飲み干すと、長谷は外回りで起きた出来事や展覧会中の絵の話、顧客の面白い話を聞かせてくれる。

身振り手振りも交えながら、かなりオーバーリアクションで話すので、長谷の話も聞くのは、瑠璃の楽しみの一つだ。

両手を広げながら話をしてきた長谷が、カウンターの隅に置いてあった雑誌に気がついて口元を緩めた。

「あ、あれは龍玄先生が載っている雑誌？」

「そうです。手が空いた時に読んでいたままにしちゃって」

瑠璃は雑誌を持ってくると長谷に手渡した。

「ほんと、先生はすごいんだよ。これなんか、本物を見た時俺は鳥肌立ちっぱなしでさ」

べらべらとめくりながら、長谷が嬉しそうに雑誌を見つめる。その姿からは、龍玄の描いた絵が好きという気持ちがよく伝わってくる。

「感動したんだよね。俺初めてだよ、絵を見て感動したのなんて。だから、先生の所に通い詰めているんだけど！」

先生はすごいんだけど、ときちんと前置きをした後に、長谷は龍玄の写真を見て困ったように口を曲げた。

「伸びっぱなしの髪には目をつぶるけど、顎の無精髭は個展が始まる時に剃らせないと。げ、なんか俺が小姑みたいだな！」

写真うつりは素晴らしいし実際見ると男の俺からしても男前なんだけどね、と長谷が羨ましそうな顔をした。

「撮影の時くらい髭を剃ってくれて、何度注意したことか……はあ、今回も絶対に

やらせなくっちゃ！」

「長谷さんは、いい小姑だと思えますよ」

「先生の顔を拝もうとして、遠方からわざわざやってくる女性ファンを悲しませるわけにはいかないんだよね、主催側の俺としては！」

鼻息荒くそこまで言うてから、長谷は「あ！」と目を見開くなり、大慌てで鞆の中からべらりと紙を一枚取り出して瑠璃に渡した。

「瑠璃ちゃんにあげようと思っていたんだ。うっかり忘れるところだった！」

「え、これっ……」

差し出された小さな紙を受け取る。印刷された文字をまじまじと眺めると、思わず動悸が激しくなった。長谷と紙に視線を交互に向けると、長谷はにっかりと微笑んだ。

「龍玄先生の来月の個展のチケット。これはエキシビション用だから、一般のお客さんが入れない特別なやつ」

「そんな……」

「瑠璃ちゃんに一枚プレゼントだよ。それに、来てくれたら先生も紹介するね」

瑠璃はもう一度そのチケットを穴が開くほど見つめた。

『エキシビション』の文字とともに非売品の文字がやけに目立つ。「一般のお客様は

入れません」と丁寧に注意文まで印字されていた。

「長谷さん……こんな貴重なものを、私がもらつていいんですか？」

「瑠璃ちゃんだからいいんだよ。いつもお世話になつていいるし、瑠璃ちゃんがいなかったら俺ほんと、毎日泣いていたよ。先生の要求する画材の、筆の一本もわからないんだよ」

「でも私、画材を注文しただけで……」

「いいの！俺は瑠璃ちゃんに助けしてもらつたんだから、お礼がしたいの。受け取つてよ」

長谷は白い歯を覗かせながら、人好きのする笑顔になる。

「まあ、お礼と言つてはあれだけど……ほら、瑠璃ちゃん最近ずつと悩んでいるみたいだから、気分転換になるかなつて」

瑠璃が自宅から出て行かなくてはいけないことも、再就職先に悩んでいることも長谷は知っている。それを気にかけてくれた優しさが、瑠璃の心に沁み込んだ。

「もちろん無料だし、カクテルとおつまみも出るから、おめかしして来てほしい」

「嬉しいです……エキシビジョンに行けるなんて、夢みたい」

「そんなに喜んでくれるんだつたら、渡したかいがあるなあ。この日なら招待客しか

来ないから混雑もしないし、ゆっくり先生の作品を見られるよ」

長谷は瑠璃が龍玄の絵が好きなることをよくわかっている。長谷の気持ちが嬉しくて、瑠璃は泣きそうになつていたので必死にこらえていた。

「きつといい展覧会にしてみせるから」

「はい、楽しみにしています」

ニヤリと笑つて、丁寧に梱包した品物を受け取ると長谷は店を去つていく。

入り口の外までついていき、後ろ姿が見えなくなるまで見送つて瑠璃は店内に戻つた。

早足にカウンターに近寄ると、置いておいたチケットを見て再度胸のドキドキが止まらなくなる。

「嘘……いいの、私が……？」

幻ではないかとチケットに触れてみたが、すっかり本物だ。鏡を見なくても、自分の顔が真っ赤になつていいるのがわかる。

もらったばかりの特別なそれを、無くさないように財布の中に入れておくと鞆のチャックをしっかりと閉じた。

大学時代からあこがれている作家の作品を鑑賞できるとあつて、瑠璃はその日の残

りの時間、夢を見ているようにふわふわと足元が浮いている感覚だった。

『ほなな、ええことあったやろ?』

「うん……すごく嬉しい」

閉店前に箒で床を掃いていると、得意げに話しかけられる。瑠璃は思わず相槌を打ってしまうほど気が緩んでしまっていた。

たくさん龍玄の絵を見られるという嬉しさに、瑠璃は胸がいっぱいになった。

『そうや、笑う門には福来るやで。そうやって笑顔でおったら、ええこときようさん来るさかい、心のちいーっぱいに幸せを詰めとき』

瑠璃は込み上げてくる喜びを抑えきれず、何度も一人で頷いて顔を赤くさせた。

*

まだ幾日も日はあつたはずなのに、気がつけば長月の月末を過ぎ、楽しみにしていた龍玄のエキシビションの日になっていた。

楽しみなことがあると、時が過ぎるのは猛烈に速い。

数日前から服装に悩みぬいた挙句、久々に着物に袖を通すことにした。

一見地味に見える留紺の着物を着ると、まるで待っていたと言わんばかりにふわわりと肌に馴染んでいく。

「ごめんね、なかなか着てあげられなくて」

母のお花の稽古に小さい時から参加していたため、着物には親しみがある。稽古は厳しくてつらかったのだが、着物は好きだった。

『お！ 着物はやっぱりええなあ』

瑠璃はウキウキしていたのだが、今日は聞こえてくるしわがれ『声』も一段と嬉しそうだ。

ワクワクしすぎて震える手先を何度も胸の前に当てて、慣れた手順で着物を着始める。きれいなものにしておいた襦袢の襟を伸ばし、お太鼓をほんの少し小さめに結びあげた。

『お化粧はせんのか?』

瑠璃は『声』に指摘されてハツとした。

襟元に手ぬぐいをかけてから、いざしようと鏡の前に座った。しかし、普段から化粧をするタイプではないため、やり方がわからずに手が止まる。

結局いつも通りのお化粧に、申し訳程度に頬紅を足した。

（あんまり得意じゃないのよね。桃子に教わっておけば良かったな）
妹の桃子は、美容の専門学校へ進学した。そのためかなり華やかで明るく、さらに言えば今どきの印象を与える見た目だ。

おしとやかといえは聞こえはいいが、地味な瑠璃とは正反対でもある。街を歩いていても、姉妹に見られたことはない。

（まあいっか。あんまり私があると、顔だけお化けになっちゃうから）

大事な時には桃子に身だしなみのチェックと調整を頼む癖がついている。瑠璃は自分が妹にまで甘えていることを自覚した。

そんな仲良しだった桃子とも、近頃は連絡をあまり取り合っていない。

厳しい美容の世界で頑張っている桃子には、自分の現状が後ろめたくて言えなかった。桃子がそんなことを気にする性格ではないとわかってはいるのに、どうにも気が引けてしまっていた。

『落ち込んでる暇ないで。ほれ、顔上げてしゃんときい。瑠璃はそのままでも美人なんやから、張り切って行けばええねん』

鏡の前でうつむいてしゅんとしてしまった瑠璃を鼓舞するように、しわがれ『声』にはっぱをかけられた。

『ぎょうさん美味いもん食べて、好きな絵をいっぱい見といでな』

（うん、ありがとう……）

瑠璃は玄関の鏡で全身をチェックし、大丈夫と意気込んだ。

久しぶりにさした口紅が、なんだかまるで自分ではない自分へ変身させてくれているような気がする。今だけはなにもかも忘れて、楽しんでほしいんだと思えた。

瑠璃は、今日だったら魔法でも使えそうな気さえしてきていた。

観光客が大勢詰めかける駅の、多国籍な雑踏を抜けてエスカレーターで地上へ向かう。外は気持ちよく晴れており、思わずほころぶ口元を引き締めて向かった。

チケットの裏に書いてあった会場に到着して、日付や場所が間違っていないかチケットを再度確認する。

引き戸のガラスから中を覗くと、人がたくさん動いているのが確認できた。

「こんにちは……」

ちょうど歩いている長谷の姿を入れてすぐのところで見つけて、胸をなでおろした。気づいてくれないかなと目配せしたのだが、長谷は忙しそうにしており入り口を見ようともしない。